

JIS M 8010: 2020 訂正および Q&A

天然ガス鉱業会

訂正 1 (本体) 【重要】

式 (68) において、「乾燥条件」を表すのであれば、不等号の向きが逆となりますので、以下の通り訂正させていただきます。

$$\text{誤: } p_{dp} \leq 0.0009 T_{dp}^4 + 0.095 T_{dp}^3 + 4.8183 T_{dp}^2 + 146.16 T_{dp} + 2029 \quad (68)$$

$$\text{正: } p_{dp} > 0.0009 T_{dp}^4 + 0.095 T_{dp}^3 + 4.8183 T_{dp}^2 + 146.16 T_{dp} + 2029 \quad (68)$$

訂正 2: (解説および説明会資料)

解説表 22 (および、これをコピーした説明資料 p.83 の右側の表) の下の方にある「旧規格の流出係数」横の記号が ε となっておりますが、 C_d の間違いですので訂正させていただきます。

Q1: (計算に使用するオリフィス孔径とオリフィス配管径)

“8.3 流量及び流出係数”の項において、計量中における径と測定値が混在しているが、計量中における径をもとに計算すべきではないか？

A:

計量値に直接影響を及ぼすものは、計量中における値である D 及び d を使用する必要があります。

その他の場合 (例えば、直管長を決める場合、レイノルズ数を求める場合、配管径を指定する場合、位置を指定する場合、等) は、直径値に精度は求められませんので、現場での手計算などの可能性を考え、 D_0 及び d_0 を用いて規定してあります。

当然ながら、すべての計算において D 及び d のみを用いても、全く問題はありません。したがって、計算機でプログラムする場合など、冒頭で D 及び d を計算し、以降の計算の全てにそれらの値を使用してもかまいません。

逆に、すべての計算に D_0 及び d_0 を用いることは、式(43)の上に規定される場合を除き、できませんのでご注意ください。

Q2: (超音波流量計における線膨張係数)

超音波流量計において、線膨張係数を考慮に入れる必要があるのか？

素材に関連した線膨張係数はベンダーから提供されるのか？例えば、取引で用いられる高精度な超音波流量計において、線膨張率が記されていない場合がある。

A:

超音波流量計を用いた計量においては、計量管断面積の熱膨張 (面積のため線膨張率の 2 倍) および配管

熱膨張による超音波パス長変化(距離のため線膨張率の1倍)により、総計で線膨張率の3倍の補正が必要となります(式(63)及び(64)にある $1+3\alpha_D(T_d-T_{D0})$ の項)。

たとえば、材料がステンレススチールで線膨張率が約 1.6×10^{-5} である場合、 10°C の温度差があった場合に約 0.05% の補正 ($3 \times 1.6 \times 10^{-5} \times 10$) となります。計量中にこの程度の差が発生しても無視できる場合がありますが、超音波流量計の K ファクターが何 $^\circ\text{C}$ を基準として設定しているかは確認の必要があります。補正はこの温度を基準として行う必要があります。

ただし、11.1 の第三段落に書かれているように、超音波流量計がもつ SPU (計算機の CPU に相当) にメーカーがプログラムすることにより、すでに必要な補正が入っている場合や、補正が組み込まれてはいるが必要な補正を使用者が設定して使用する場合(設定しなければ補正は行われなくなる)、取付け時にメーカー／ベンダーが補正を設定する場合、さらにはそのような補正機能を持たない超音波流量計もあり得るため、個々の超音波流量計において十分に仕様を確認する必要があります。補正を二重にかけると、及び、必要な補正をかけないことが無いようご注意ください。

線膨張率が提供されない超音波流量計においては、すでにその補正が組み込まれている可能性があります。その補正を行うためには、計量中における温度の入力が必要となるため、ユーザーがその温度値を入力するように設定／設計するか、または超音波流量計が自身で補正用温度センサーをもっている場合などもあり得ますので、よく仕様／取扱説明書をご確認ください。

Q3: (標準状態の計量値を求める式における湿度補正係数)

9.3.1.2 (容積式), 10.3.1.2 (渦流量計), 11.2.1.2 (超音波) に記載されている F_{wv} は全て 1 であるとして良いか？

標準状態とは相対湿度が常に 0% とした状態である。相対湿度が 0% であれば含まれている水蒸気がまったく存在しない乾燥状態であるため、 F_{wv} は 1 と考えられる。

また常に 1 であるのであれば上記の式に含めた理由は何か？

A:

水蒸気が含まれた状態で行われた測定値を、温度圧力が異なり湿度がゼロ% の標準状態での計量値にするためには、測定値を標準状態の温度圧力での値に変換したのちに、水蒸気が占める体積分を取り除く計算が行なわれます(Q16 もご覧ください)。

式(34)、式(56)などで F_{wv} を除いた式 ($F_{wv}=1$ とした式) は、この温度圧力の変換を行った値となり、これに F_{wv} をかけることが、水蒸気占める体積分を取り除くことに対応します。

詳細は解説 4.3 を、計算例は解説 5.6.5 を参照ください。

Q4: (天然ガスの組成)

今回から JIS M 8010 に取り入れられた AGA8 で定義されている組成と、JIS M 8010 で定義されている組成に差異がある。JIS M 8010 で定義されていない組成の扱いはどうするのか？ 例: H_2O , H_2S (一般的な天然ガス組成)

A:

JIS M 8010 は、国内で生産される天然ガスの計量に使用することを主目的として作成されています。そのため、国内のガスにほとんど含まれない成分は、煩雑さを避けるため、除外してあります。

H₂O に関しては、産出元では湿度 100% の場合が多いですが、そこで行われる計量は監視用途がほとんどであって、正確な値を必要とする計量は、水分がほとんど除去されたパイプラインなどで行われますので、 F_{wv} による補正として扱っております。

国外などにある多様なガスに対応するためには、AGA や ISO をご参照ください。12.3.1 などに書かれていますが、JIS M 8010 を使用する際に、これに規定される Z 数表を用いず、AGA8-92DC 法で直接計算した値を用いても、全く問題はありません。

最近では、AGA8-92DC 法や GERG 法を組み込んだフローコンピューターの普及が始まっていますので、必要に応じ、12.3.1 にある通りその計算結果が正しいことを確認した上で、それらを使用されることを推奨します。想定範囲外の成分を持つガスに Z 数表を用いた場合、解説図 6 に示されるように、大きな誤差が発生する可能性があります。

詳細は解説 3.3、4.4 を参照ください。

Q5: (密度、アイゼントロピック指数、モル質量の計算方法)

ガスの密度、アイゼントロピック指数、モル質量の算出方式が JIS M 8010 に定義されているが、AGA8-92DC 法を用いて算出された値を用いても良いか？

A:

全く問題ありません。Q4 もご参照ください。

ただし、正確に言えば、モル質量は AGA8-92DC 法では計算されませんので、AGA8-92DC 法による計算に用いられた値が表示されるものと考えられます。

Q6: (基準状態における圧縮率)

標準状態から基準状態の換算(式(1)及び(2))に、基準/標準状態の圧縮比が考慮されていないように見えるが、考慮する必要はないのか？

A:

標準状態から基準状態への換算は、解説 5.2 に書かれている通り、旧 JIS M 8010: 1993 にある方法をそのまま継承しています。旧 JIS の解説、4.4 (2) 「Nm³ と Sm³ の換算」をご参照ください。

標準状態と規準状態は、同じ大気圧で定義されており、また、温度も共に常温域ですので、圧縮係数はほとんど同じ値になります。したがって、必要精度を考えれば、これを換算式に入れる必要はありません。

Q7: (旧版との計算結果の差)

計算例として 1993 年版と 2020 年版の比較があるが、全体的な条件範囲で比較するとどうなるか？計量値の増減はどうなるか？

A:

規格が網羅するガス種は多岐にわたり、温度圧力流量等条件も広範囲にわたりますので、旧版の値に対する新版による計量値の増減は、一般的に述べることは困難です。

必要なサンプルが集まりましたら、新版による計算結果を提示することは可能です(個別の対応は難しいと思われれます)。サンプル計算には、以下の情報が必要となります。

測定量	単位
オリフィス管径	mm
オリフィス孔径	
オリフィス差圧	kPa
オリフィス上流側圧力取出しロゲージ圧	
オリフィス上流側圧力取出し口温度	°C
露点温度	
ゲージ圧測定時の大気圧	kPa
露点温度測定圧力（絶対圧）	

材質等	単位
オリフィス管線膨張率	/K
オリフィス板線膨張率	
オリフィス管径測定温度	°C
オリフィス孔径測定温度	
圧力取出し方法（F/C/D）	-

成分	単位
N2	vol/vol
CO2	
CH4	
C2H6	
C3H8	
nC4H10	
iC4H10	
nC5H12	
iC5H12	
C6H14	
C7H16	
C8H18	
C9H20	
C10H22	
H2	
O2	
CO	
H2O	
SH2	
He	
Ar	

Q8: (旧版の付表が使用可能な圧力上限値)

圧縮係数を計算する旧版の Z 付表は 1 MPa まで使用可能とされているが、この上限はどのように決めたのか？

A:

1 MPa を少しでも超えると急激に誤差が増えるなどの理由はありません。ガスを使用する配管が、大きく分けて 10K 配管かそれ以外となりますので、1 MPa に設定してあります。

解説図 7 の下側の図にあるように、旧版の Z 数表でも、1 MPa 以下ではほとんど誤差は出ません(グラフ上のそれぞれの太い縦線間の右の 2 点=1 気圧と 10 気圧)。また、説明会資料の p.14 左上のグラフにあるように、Standing-Katz の式によっても、1 MPa 以下であれば、誤差は大きくても 0.2%以下となるという結果になっています。1992 年に発表された AGA8-92DC 法の結果は、このグラフには示されていませんが、これらの結果を反映させて作られたものですので、ほぼ 0%の軸上にあると考えられます。

その他の条件における旧版 Z 付表の誤差に関しては、解説図 7、説明会資料 p.16 などをご覧ください。

Q9: (温度による寸法補正)

流量計や配管の寸法補正にガスの温度を使用することになっているが、実際のパイプラインでは寒冷地での使用も多く、冬季の大気温度と地中のパイプラインを流れるガス温度とに差がある場合、どう扱えばよいか？

A:

ガスと配管や環境の温度が大きく異なる場合、正確な計量は非常に難しくなります。寸法補正は、本来、流量計材料の温度で行うべきものですが、そのような環境下では、材料内で温度分布が発生しているため、補正は非常に複雑になります。また、その分布は構造によっても大きく異なりますので、規格で一般的に扱うことはできません。一方、計量現場で材料温度を測定している例はほとんど無く、そのような温度測定を前提とすることもできません。そのため、唯一の普遍的な条件となる、ガス、流量計、環境の温度が同じになっている場合のみを規格で扱っています。

計量現場で大きな温度差がある場合には、専門家に個別に対策を検討してもらう必要があります。例えば、ガス、流量計、環境または配管(内壁外壁温度)の最大最小温度でどの程度差が出るかを評価し、その間の確からしい値を使うなども方策の一つとして考えられます。

さらに、寸法補正とは別の話となりますが、そのような環境下では、ガス温度の測定が最も難しいものの一つとなることに注意が必要です。温度センサーには保護管が付いており、その保護管は金属製で配管に固定されていますので、ガス温度として測定される値は、実は配管の内壁温度に大きく支配されています。気体と金属の接触による熱伝達で形成される温度分布が、金属内の熱伝導により形成される温度分布に比べ、格段に小さいことが理由となります。これを避けるためには、温度センサーを十分に長くして、流れの中に入れるなどがありますが、ガス温度が安定していることが条件となり、また、温度差がある場合には、配管からガスへの熱の流入があるため、ガスの温度が流れと共に変化してしまいます。

Q10: (露点温度を測定しないが飽和している場合の湿度補正係数)

ガスが完全に飽和している場合、露点温度を測らずに湿度補正係数を求めることはできるか？

A:

水蒸気が完全に飽和しているガスでは、少しでも温度が降下したり圧力が上昇すると、水蒸気が液化してガスの体積が大きく減りますので、注意が必要です。

温度圧力の測定位置以降にこのような凝縮がないことを前提とすれば、測定された温度が「露点温度」、測定された圧力が「露点温度を測定した圧力」となり、規格通りに補正が可能となります。

Q11: (水蒸気露点温度測定における他成分の凝縮)

重い炭化水素は水蒸気と同程度の温度で凝縮するため、水蒸気のみ露点温度の測定は難しいのでは？

A:

露点温度の測定は、水蒸気成分を除いたガスの体積(標準状態での体積)を求めるために行われます。したがって露点温度測定は、水蒸気のみについて行う必要があります。天然ガスにおける水蒸気露点温度測定は、これまで行われてきたものですので、その方法に従ってください。

Q12: (不確かさの評価法)

不確かさの考え方について、1993年版の式(17)式を踏襲することはできないか？

A:

表 5 にある不確かさ要因は、可能な限り感度係数を計算しておくために、式に出てくる変数のほぼすべてを網羅しています。しかし、説明会資料 p.62 にあるように、要素不確かさの最大値に対して十分に小さい大きさ（例えば 1/3 など。ただし、状況によってどの程度が無視できるかは、個別にご検討ください。）の不確かさの影響は無視できますので（ゼロとしてよい）、通常、このすべてを評価する必要はありません。不確かさ評価を行う際には、計量環境における要素不確かさの大きさを比較し、必要な項目を選び出してください。

一般的な計量環境であれば、無視できる項を取り除くことにより、不確かさを評価する式は、旧版の式(17)に近い形に集約されるはずですが、その後には出版された JIS Z 8762-1:2007 では、若干違う式になっていますので、JIS Z 8762-1:2007 の 8.2.2.1 にある式をご参照ください。

Q13: (オリフィス流出係数の算出法)

オリフィス流量計の計算例について、2020 年版では、レイノルズ数の繰り返し計算を行って流出係数を算出しているが、1993 年版のように限界レイノルズ数における流出係数を用いる手法（従来手法）は推奨されないのか。

A:

WG では、従来手法を用いた計算とも比較しておりますが、計算結果は一致しておりました。したがって、従来方法で計算することも可能と考えられます。

必要なことは、流出係数を用いてレイノルズ数を求め、そのレイノルズ数を用いて計算した流出係数が、レイノルズ数の計算に用いた流出係数と一致することだけですので、この点が確認できるのであれば、どんな方法でも使用可能です。

Q14: (露点温度の測定位置)

露点温度の測定位置に規定等は無いのか？

A:

露点温度の測定は、流量計の位置でのガス成分（水蒸気含有率）を決めるために行うものですので、測定位置と流量計の間で、外部からのガスの流出入や凝縮などによる成分変化が発生しないことだけが条件となります。個々の計量現場において、この条件を満たす場所で測定を行ってください。

Q15: (ガスクロで水蒸気成分が計算できる場合の湿度補正係数)

ガスクロ(GC)で水蒸気(H₂O)が測定できる場合には、どのようにしたら良いか？

A:

x_{wv} は水蒸気の実分率ですので、式(71)において、ガスクロの測定値で計算した水蒸気の実分率を使っても問題はありませぬ。その場合、式(69)、(70)の計算は不要となります。

Q16: (水蒸気成分を考慮した物性値の計算と湿度補正係数の必要性)

GC で水蒸気成分が測定できる場合、これを入れて圧縮係数を計算すべきでは？ その場合には、湿度補正は不要になるのか？

A:

圧縮係数、アイゼントロピック指数、モル質量、粘度の物性値の計算には、水蒸気成分も考慮した方が、より精度の高い計量が可能となります。しかし JIS M 8010 は、Q4 の回答にありますように、国内の計量現場を反映させて作っておりますので、高精度を要する計量現場では水蒸気成分が十分に少ないことを前提とし、物性値の計算に水蒸気成分は入れておりません。

標準状態での計量値は、湿度を含んだ計量状態での体積を標準状態の圧力温度での値に変換し、そののちに湿度補正係数 F_{wv} を用いて湿度 0% での体積 (湿度成分を除いた体積) に換算して求めるため、圧縮係数などの物性値に水蒸気成分を入れて計算した場合であっても、 F_{wv} が不要にはならないことに注意が必要です。

すなわち、湿度成分が測定でき、物性値の計算にその成分を反映させた場合であっても、標準状態の温度圧力での値に変換したところまでは、湿度成分を含んだ条件で計算されており、標準状態での値 (湿度 0%) にするためには、その値に F_{wv} をかける必要があります。

ただし、この湿度補正は、繰り返しになりますが国内事情を反映したものであり、極端な水蒸気条件では誤差が大きくなる可能性のある簡易的な方法となりますので、十分にご注意ください。極端な条件での正確な換算には、分圧を使用して計算する必要があります。または、計量状態での体積から分圧を使用して水蒸気成分を除き、これを標準状態での圧力温度での値に変換するなどの方法も考えられますが、JIS M 8010 ではその方法は扱っておりません。

Q17: (圧力の定義について)

本 JIS では、ガスの圧力を絶対圧で定義しておりますが、12.3 の表題の 1MPa は、絶対圧とゲージ圧のどちらですか？

A:

12.3 の表題の 1MPa は、ゲージ圧です。絶対圧として 1.1MPa と読んでください。次回の改定時には明確にするよう修正する予定です。